

グローバル企業で活躍する卒業生から貴重な体験談を聞いた



卒業生に海外で働く心得聴く

グローバルキャリア・サポートプログラム

外資系企業や海外展開する日本企業への就職を目指す学生を対象にした本学独自の就職支援「グローバルキャリア・サポートプログラム」が4月22日、生田キャンパスで始まった。

4月29日は、グローバル企業で活躍する森良平さん(平26法)と間藤幸汰さん(令6文)を招き、具体的な仕事内容や就活体験について話を聞いた。

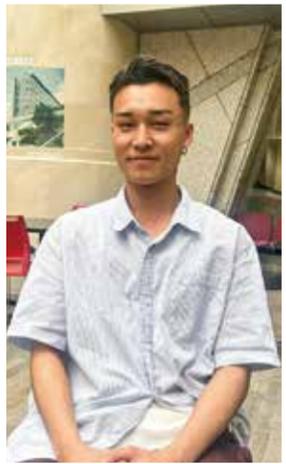
森さんは、日系の建設機械メーカーに就職。入社9年目にフィリピン駐在を経験した。

森さんは、日系の建設機械メーカーに就職。入社9年目にフィリピン駐在を経験した。

森さんは、日系の建設機械メーカーに就職。入社9年目にフィリピン駐在を経験した。

太楽岳斗さん(経済3)は、メキシコのストリートチルドレンの支援に取り組んでいる。「一人でも多くの子どもたちを救いたい。子どもたちの笑顔を守りたい」。過酷な環境の中で懸命に生きる子どもたちの灯火になろうと、奮闘を続けている。

太楽さんは2年次で、狐崎知己経済学部教授の「NGO論」を履修し、メキシコへのスタディツアーに参加した。「その時に出会った子どもたちの笑顔が忘れられない。この笑顔を忘れない。」



メキシコのストリートチルドレンを支援

「私たちの活動は、人に寄り添うということ。これからはメキシコの人々に寄り添いたい」と語る太楽さん



メキシコシティの廃ビル。ここで少女を発見し、説得を続けた

「ストリートエデュケーター」は路上の子どもたちや家族の元に足を運び、そこから抜け出せるようにさまざまな活動を提示する。路上で暮らす人々は警戒心が強く、外国人である太楽さんは受け入れられなかった。

今は「ストリートチルドレンを育てる会(東京都)の運営委員として、メキシコでの経験を広く伝えている。現地の仲間が立ち上げた団体を支援するため、寄付を募っている。「目標は100万円。子どもたちの教育と生活を守るために、一人でも多くの人に現状を知ってもらい、彼らの自立のために力を貸してほしい」と呼び掛ける。

「ストリートエデュケーター」は路上の子どもたちや家族の元に足を運び、そこから抜け出せるようにさまざまな活動を提示する。路上で暮らす人々は警戒心が強く、外国人である太楽さんは受け入れられなかった。

今は「ストリートチルドレンを育てる会(東京都)の運営委員として、メキシコでの経験を広く伝えている。現地の仲間が立ち上げた団体を支援するため、寄付を募っている。「目標は100万円。子どもたちの教育と生活を守るために、一人でも多くの人に現状を知ってもらい、彼らの自立のために力を貸してほしい」と呼び掛ける。

就職だより

〈今年次生へ〉社会で活躍する本学卒業生による「専大OB・OGパネルドイスクッション&座談会」を6月21日(土)に対面で開催します。企業のホームページや説明会では知ることができない情報や、OB・OGの生の声が聞ける貴重な機会です。ぜひ参加してください。開催場所は神田キャンパス10号館(予定)・詳細は「S-net」で確認してください。

〈4年次生へ〉4年次生を対象とした求人情報が引き続き多くの企業から届いています。これらの情報は、就職支援システム「S-net」に掲載されていますので、就職活動のしるはキャリア形成支援課窓口にて必ず提出してください。「in Cam pus」から「就職アンケート」の回答にも協力をお願いします。



2025年度長期交換留学プログラム(第2期)の留学生は、英語コース3人に決まった。留学先と派遣期間、氏名、学部学年は次の通り。(敬称略)



渡辺ゼミ・ベジコミ班のメンバー

25年度長期交換留学プログラム(第2期)

2025年度長期交換留学プログラム(第2期)の留学生は、英語コース3人に決まった。留学先と派遣期間、氏名、学部学年は次の通り。(敬称略)

オレゴン大学(米国、6月26日3月) 櫻井慎也(法3)▽岡田悠(商2)▽花田海斗(文4)

「野菜クレヨン」ワークショップ



野菜クレヨンづくりに取り組む参加者

食とサステナビリティや食品ロス問題に取り組んでいる商学部・渡辺達朗ゼミ生は、ゴールデンウィーク期間中、学外で二つのワークショップを開催した。

渡辺ゼミ「ベジコミ」班では昨年度から、規格外野菜を使ったクレヨンづくりに取り組みしており、5月3日は和食チェーン「大戸屋ごはん処」とコラボ。千代田区丸の内の大戸屋店舗で親子連れを対象にしたワークショップを実施した。

当日は2歳から小学校高学年まで親子11組が参加。店舗で出た廃棄野菜を「東京ミッドタウン」でもワークショップを行った。

また、進路決定者は「進路路」を就職支援システム「S-net」も引き続き活用してください。個別相談でも求人情報の相談を受け付けていますので、積極的に活用してください。

近年の表現の自由とジャーナリズムのありようは、2000年代に入ってから相次いだ表現規制立法、15年ごろからの政治的公正さを理由とした放送局への圧力や政治色が強い作品展示の拒否といった付随の蔓延、そして20年以降のコロナ禍を理由とする市民の自由や権利全体の縮減と、どんどん悪化の一途をたどっている。

前作の2冊『見張塔からずっと』『愚かな風』はそうした前2期の状況を、そして本書は3期目をそれぞれ描いている。いずれもポブ・ディランの詩からタイトルを付けたが、この3部作で時代の流れを理解しただけでは足りないかと思う。そして未来に向けての希望

転がる石のようにつまみつぶれるジャーナリズムと軌を表現の自由

山田健太 著

著者(なから・よしあき) 経済学部教授。産業界政策論。

高度成長期、自動車産業とともに日本経済のけん引役だった電機産業。その主要アクターは、多角化し、家電製品から半導体までさまざまな製品を作る総合電機メーカーであった。それらはリーマンショックを契機に大きな赤字を計上し、選択と集中の掛け声のもと、フルセットのメーカーから変容していった。コングロマリット・プレミア

破壊

日本の電機産業の創造的破壊

中村吉明 著

このように総合電機メーカーは、業態、業績とも同じカテゴリーの企業とは言いえない企業群となっていました。それらの違いはどこから来るのだろうか。経営者の能力か、マネジメントや経営戦略の違いなのか。本書はその要因を探る。(専修大学出版局・税込込み3000円)